的魅力がたんのうされ，またそこで調査研究のできた隊員の方々をたいへんに羨しく思う。それに，短時間にしてはかなりの量のデータを集め，その努力を多とする。

しかしながら，まことに残念に思うのは，調査の期間が短いことと，出版の都合で資料の分析に時間が十分にかけられなかったことではなかろうか。たとえば，一例をあげると，チッタゴン地方の丘陵人が竹文化を持っているという客観的な事実にはまったく異議をさしはさむ余地はないけれども，竹の持つ特質が〝丘陵人のパーソナリティーをきわめて象徴的に示唆するものと思われる〟という記述になると，いささか無理があるのではないかと思われる。筆者は竹と丘陵人の持つパーソナリティーの比喩として使ったのだとは思うけれども，自然とパーソナリティーをむすびつけるのには，労働過程のようないくつかの中間項が必要なのではなかろうか。

また，この種の調査報告書には調査隊の踏査の全体を示す地図と，簡単な隊の日誌があれば，読者にとってたいへんに便利である。

以上，若干の問題はあるにせよ，この報告書はチッタゴン丘陵地帯研究のわが国におけるパイオニア・ワークであり，貴重な文献である。それゆえ，この報告書をもとに，南アジアと東南アジアをむすぶ学問的に重要なこの地域の調査研究がさらに発展することを心から望むのである。　（飯島　茂）

Richard B. Noss : *Thai Reference Grammar,* Foreign Service Institute, Department of State, Washington, D. C. 964. iv＋254p.

タイ語について書かれた書物は，タイ国にて行なわれて来た伝統的な文法や純粋に実用的な目的のみのために書かれたものとは別に，現在の記述言語学の立場から書かれたものとなると，ほとんど皆無と言ってよい程である。

本書はその様な数すくない書物のひとつである。と云うよりも，一定の方法をもって，タイ語と言う一つの言語の構造全体を記述しようとする書物としては，唯一のものではなかろうか？　この点においても，本書はアメリカにおけるタイ語研究の現在の水準を示すものと言ってよいであろう。本書であつかわれている言語はバンコックを中心として話されている標準タイ語であり，著者が合計7人のインフォーマントを使ってアメリカ及びタイ国で四年間をついやしてまとめあげたものであって，それだけに詳細を極めたものである。本書の構成は，まず Introduction，次いで Phonology，Morphology and Syntax，最後に Lexeme Classes を論じ，この Lexeme Classes が Free Lexeme Classes と Bound Lexeme Classes とに大分される。これ等全体を通じて一定の方法論でもってつらぬかれている。

Phonology では，Phonemes を大別して Syllabic Phonemes と Prosodic Phonemes とする。前者には Consonants，Vowels 及び Tones があり，後者には Stress，Rythm，Intonation が含まれる。表記法は Haas 式の音素表記が用いられているが，Stress，Rythm，Intonation を考りょに入れた点で，本書の方が Haas よりも，より進歩していると言ってよいであろう。また従来タイ語には五つの Tones が認められて来たに対し，本書では六つの Tones を認めている。すなわち，これまでの(1)中平型，(2)低平型，(3)下降型，(4)上昇型に対し，(1) Plain High，(2) Constricted High，(3) Mid，(4) Low，(5) Falling，(6) Rising を設定する。しかし，この High に Plain High と Constricted High との二つを認めることには疑問を感ずる。Plain High Tone を持つとされている Morphemes を見ると，/chan (Plain High) <一人称代名詞>，/khaw/(Plain High) <三人称代名詞>，/maj/(Plain High)<疑問を表わす morpheme> などのある特別なものにかぎられており，数的にも少ないことがわかる。したがって，わざわざ Tone を一つ多く設定するよりも，Prosodic Phoneme と言う観点から処理する方が，より賢明だと考えられる。

Morphology and Syntax においては，Prosodic Morphemes, Morphemes を論じ，ついで Lexemes の構成，Syntactic Construction について例をあげて説明して行く。最後に Lexeme Classes をあつかっている。上にあげた色々な点について，今ここで検討している余裕はないけれども，この様な現代記述言語学の方法によるタイ語の文法が現れたことは，タイ語研究にとってよろこぶべきことである。本書で用いられている様な方法論に賛成するか否かは別にして，一度は精読すべき書である。　（桂　満希郎）